



ブックレビュー

鈴木孝憲 著 『2020年のブラジル経済』

発行元◎日本経済新聞出版社
発行年月◎2010年11月
総ページ数◎236ページ
価 格◎2100円(税込)



BRICsの中で後じんを拝していたブラジルが注目を浴びている。ブラジルは世界最大の純農業輸出国である。鉄鉱石など多様な鉱物資源を保有する。石油の輸出国に転じ、エタノールなどバイオ燃料の輸出能力をもつ。経済成長と貧困政策によって多くの人々が貧困から脱し巨大な国内市場が立ち上がりつつある。宿命ともいえたインフレはリアルプランとよばれる安定化政策によって収束した。2014年にはサッカー・ワールドカップ、2016年にはオリンピックが予定されている。今後5%の成長を続ければ2020年にはGDPは世界第5位か第6位の2.6兆ドルになると予想される。本書は急激に変貌するブラジル経済を余すところなく、しかし簡潔に描いている。長くブラジル東京銀行に勤務し、現在もブラジルに滞在している著者ゆえに成せる業である。

著者は、2008年のリーマン・ショック後の経済危機をなせいち早く脱することができたのかという設問から、ブラジル経済論を始める。その答えはブラジル経済のファンダメンタルズの改善と政府の機動的で果敢な行動であった。ブラジルは、国内的には財政規律、インフレ・ターゲットを通じて経済安定化を実現し、制度改革によって金融システムの健全化を果たし、対外的には堅調

な輸出と直接投資によって外貨準備を積み増し、国際収支を大幅に改善した。インフレの再燃、デフォルトの危険は遠のいていた。こうした条件を背景に、政府は金融緩和、減税などを通じて国内景気刺激策を施行し、金融危機の影響を緩和し経済を浮揚させることに成功した。著者は明言していないが、こうした危機対応ができたのは、政府当局の政策能力が飛躍的に向上したからである。

続いて著者はブラジル経済のダイナミズムの源泉を論じる。ひとつは社会の多元性である。ブラジルは多様な人種、民族、宗教、文化から構成される社会であるが、こうした多元性が経済に活力を与えている。ブラジルは企業家精神あふれる社会でもある。超深海での石油開発、バイオ燃料、それを利用したフレックス燃料車、アグリビジネスなど、高い国際競争力をもつ産業が数多く存在する。外国企業の参入もブラジルの産業に活力を与えている。欧米企業に加え近年では韓国・中国企業が積極的な投資をしている。これに対して日本企業はなお低調である。このままだと成長するブラジルで事業機会を失うと著者は警告している。こうした要因以上にブラジル経済にダイナミズムを与えているのは、厚い中間層の登場である。インフレの

収束と、ボルサファミリアとよばれる貧困層への現金給付政策、最低賃金引き上げなどの一連の所得政策が、2000万人以上の人々を貧困から脱出させた。彼らの活発な消費が経済をけん引しているのである。

このように本書はブラジル経済の飛躍を描いているが、それがもつ弱点、課題の指摘も忘れていない。著者は、公務員人件費、社会保障費の増大に伴う財政赤字、複雑な税制と高い国民税負担、インフラの未整備、景気の過熱とインフレ懸念、為替の上昇と製造業の国際競争力の低下、政治の腐敗、改善しない治安などをあげ、それらの克服が持続的な経済発展と先進国入りの条件であるとしている。

本書はブラジルの成長の仕組みを解剖するとともに、その問題点を鋭く指摘したバランスのとれたブラジル経済論である。本書を読むと、かつてわれわれがもっていた劣等生のイメージとは大きく異なるブラジルを発見するであろう。かたや日本経済の現状はどうであろうか。本書は、ブラジルにかかわる人々の必読の書であるが、適切な成長政策、社会政策を何ら示し得ない現在の劣等生、日本の学習書かもしれない。
(立命館大学 経済学部 国際経済学科 教授 小池洋一)

